

S-P表を作ってみると、問題の難易度や正答・誤答の傾向が一目でわかり、学級や生徒個人の学習を診断することも容易になります。クラス全体として達成した目標と達成しなかった目標は何か、今後何を教えなければならないか、あるいは、もっと演習させるべきことは何か、などが明らかになり、追指導や指導計画の修正に役立てることが出来ます。また、誰がどんな問題につまずいているのが判明し、いわゆる習熟度別学習の資料が得られ、その指導が容易になります。要するに、S-P表は、テスト得点の統計的な処理・分析のほかに、指導目標や生徒個人に照らし合わせた質的な分析・検討を行うのに好都合な得点処理法の一つなのです。

1 S-P表の作り方

- (1) 事前テスト、単元テストなどの反応結果に対し、正答には「1」、誤答・無答には、「0」で、集計表に表示します。これがS-P原表です。大問が段階ごとに小問に区分できるときには、それぞれを1問として扱うようにします。無答も「0」として扱いますが、誤答と無答は質的にも異なるので、何らかの別表示、例えば空欄にしておくと、以後の分析のときより効果的です。この集計表は、テストを回収し、採点して作りますが、テストの種類によっては、生徒に解答例を示して、各自に採点させ、集計カードに転記させて回収する方法も考えられます。豆テストの場合なら、アナライザーの個別記録器を利用すれば、授業中に容易に得られます。
- (2) S-P原表をもとにして、縦方向の上から合計得点の高い生徒の順に並び、横方向の左から正答率の高い問題の順に並び換えると、S-P表ができあがります。このとき、複写機を利用して、S-P原表を切り張りしながら、2段階の並び換えをしますと、誤りも少なく、しかも極めて能率的です。
同得点者については、その生徒の反応のうち、正答に対応する小問ごとの正答者を合計して、その合計の多い順に並びます。同じ正答率の小問の場合は、各々の小問の正答に対応する生徒の合計得点の高い順に並びます。
- (3) 次に、正答と誤答・無答の分布区間をはっきりさせるため、「1」と「0」のそれぞれを寄せ集めたと考えて操作し、両者の間に階段状の境界線